

昔の浮世繪と今の美人畫

泉鏡花作

明治四十四年十月

「然うですね、浮世繪にも何の繪にも、私はまだ、繪畫に就いて、學問的に研究した事はない。「浮世繪類考」一冊さへ、ちゃんと讀んだ事はないんだから、繪の批評だの、研究だのと云ふ事では困るが、宛で素人の唯談話だと思つて聞いて頂き度い。」

然し、演劇にしる、繪にしる、能樂にしる、自分の感じを、所好、嫌ひ、といふ事に就いては、何を言つても好からうと思ふのです。批評は出来ないまでも、一通り感じたゞけの事を申しませう。

處で一寸、その素人には、何故よく繪の事が分らないかといふ、茲に一例を引いて見ると――是はたゞほんの道樂で、以前大分草雙紙を買集めた事があるんです。すると、その頃丁度、鰭崎君、是が又、甚だ熱心で、方々珍本を漁つて歩きました。

勿論、珍本と云つても、お價値のある、何も結構な珍本ではないので、ザラにある大和文庫や、白縫物語がやゝ向上して、邯鄲諸國物語と、云つた處が、その諸國物語、女房氣質が、既に數の少ない方なので、どうも何町の古本屋の店へ行つて見ても、是はと思ふほどの物も見當らない。で、よく鱒崎君と同伴に歩きながら、昔からある、江戸そのまゝの舊家らしいのを見ると、その前へ立停つては、此處等には屹度草雙紙があるだらうが、賣つてくれないものだらうか、と言つたくらゐ。何方も少々逆上の氣味でした。

が、その本が見付かりさへすると、私は成るだけ、部數の揃つた、本も綺麗なが欲しくて買ふのに、鱒崎君のは、然うではなくて、たとへ本は穢くても、端本でも構はぬといふ風でした。

と云ふと、何か、部數の揃つた、本の綺麗なのを買ふ私の方が、工面が好くて、鱒崎君の方が悪いやうにも聞えるが、決して然うではないのです。

草雙紙は何も、部數の揃つた、綺麗なのばかりが

高いと極つた譯ではない。又、好いと云つた譯ではない。而して、茲に不思議な事は、その本文は左に右として、肝心の繪の方になると、私の買った、部數の揃つた、綺麗な方のより、却つてその鱧崎君の方の、名も分らない、汚い、端本の繪に、後で私が見ても、成程是は佳いと、思ふやうなのが澤山ありました。いつまでもその繪の印象が残るやつなのが多かつたのです。

茲に一寸申して置き度いのは、その、いつまでも後へ残るといふ事なのですが、是は、私自身の常に、演劇なり、繪なり、能樂なりを見る時の、批評の標準と云つて宜しいのです。

で、例へば上野の展覽會を見に行つた時でも、能なり、演劇なりを見に行つた時でも、私は、それを見ている間は、決して、その筆使ひが何うの、眼付が何うの、足拍子が何うのといふ事に就ては、部々々々に一々研究して見て居る譯でも何でもなくて、何方かと云へば、まあ、繪だつて數の多いのがよし、演劇だつて幕數の成るだけ多い方を歓迎すると云つ

た方ほうなのですが、不思議ふしぎと、その演劇しばるなり、會場くわいじやうなりを出でて了しまふと歸かへりには屹度きつと、その時ときに見みた、不快ふくわいな藝術げいじゆつ、満つまらなかつた幕まく、是これは不味まずいと思おもつた事ことなぞは、皆みな大概たいがい忘れて了しまふ。而さうしてその中なかでも一番面ばんおも白しろかつたのや、極ごくく佳よかつたと思おもつたのはいつまでも記憶きおくに残のこつて居あるのです。でそれを最もつともまあ私わたしは、佳よい物ものだとして居あるのですが、此この意味いみで、佳よい物ものだと思おもつた物は、その時ときはさほど注意ちゆういを拂はらはなかつた物ものも、日ひが經たつに從したがつて、益ます々／＼それが明瞭めいれうになつて來くる。頻しきりと目め前さきへチラついて來くる。例たとへば一寸ちよつと通とほりすがりに、佳よい女をんなを見みた時ときのやうなもので。要やうするに、その繪ゑ、その物ものに、岡惚おかぼれをして了しまふのですな。事ことに依よると本惚ほんぼれなのかも知しれませんが、然さうすると先方さきも迷惑めいわくだらうから、ま、岡惚おかぼれとして置あきませう。

處ところが、その、鰭崎君ひれざきくんの買かつて來きた草雙紙くさざうしの中なかには、景色けしきなり、趣おもむきなり、又また、人物じんぶつなりに、その所謂いわゆる岡惚おかぼれをするのが多度たんとある。私わたしにはそれが少すくない。

で、その岡惚おかぼれを假かりに女をんなだとします。御存ごぞんじの草くさ

ふのです。

昔むかしの浮世うきよ繪ゑの女をんなは、立たつて居ゐる處ところでも、坐すわつて居ゐる處ところでも、乃至ないしは、少々せう／＼駈かけ出した處ところでも、決けつしてその「容姿すがた」といふものを失うはない。「しどけない」といふ容姿ようしはあつても、「だらしない」といふ形かたちはない。例たとへば花野はなのを風かぜが吹ふいても、猶なほ風情ふぜいあるが如ごときもので、決けつして、今いまの美人畫びじんぐわ、乃至ないし女のやうに、無作法ぶさほうにバタバタ電車でんしゃを追駈おひかけたり、又また、運動會うんどうかいに徒歩競走かちきやうそうをする時ときのやうな、滑稽こつげいなものではない、失禮しつれいなものではない、寧むしろ悲惨ひさんなものではない。

私わたしは一體たい、その「容姿すがた」だの「風情ふぜい」なるものは、女をんなは全身ぜんしん皆みなそれだなければならぬと思おもふ。然しかるに今いまの美人畫びじんぐわ、乃至ないし女をんなは、顔かほは少々せう／＼綺麗きれいでも、皆みなその「容姿すがた」でぶち壊こはして居ゐます。顔かほや、體からだの上半身じやうはんしんは、それは、さして取亂とりみだす事こともありませんが、所謂いはゆる、裳もすそ、棲つまはづれ、是これが中々なか／＼難むづかしいものだと思おもひ見みえて、繪ゑでも、事實じつじつでも、現代いまのは皆みなぶち壊こはして居ゐます。

一體たい、近頃ちかごろの美人畫びじんぐわは　――濱町はまぢやうや、丹後町たんごぢやうや、

その他私の親類筋を除いて――皆半身の繪が多くなりしました。つまり、その下半身、帶腰から下を書いたのが少なくなつたのです。縦令、又、書いてあつたにしても、今いふ、その裾捌き、襷はづれのこなし工合に、感服出来るのがありません。

これは、蓋し、其處等へ出て来る女の、正の物の裾捌きが、一體に不味くなつたのが原因で、つい繪を描く人の方でも、やりにくくなつた所爲もあるのではうが。特に拙い美人畫になると、（特に拙いと斷つて置きます）「形」があつて、「容姿」がない。で、是を花に譬へて見ると、女郎花を一本描いても、新雜棒に團子を五六本くつつけて、又ツと押立てた形なんです。彼の所謂、曉臺の「風情なるかな露の中」と云ふやうな趣きが更に無い。

勿論、現代の女が然うである。現代の女は、或意味に於て「形」ばかりあつて「容姿」がない。人物畫と云ふものが、或意味に於て、その時代の人物を描き現すべきものだとする、第一廂髪を上へ乗つけて、裾を曳いた女の姿は、描けやうがない筈であ

る。然し、それは風俗談に互りますから悉しくは申しません。

儲て、次に、帯であるが。是は誰しも、綺麗にキ
チンと書いてあるから、さして缺點も見出されませ
ぬが、此の、兩の、袖、袂、是が又難かしいものだ
と見えて、満足に出来たのがない。

例の、近來の上半身式の繪、それにさへ此の風情
は閑却して居る。何か恚う描かれた線の工合と云ひ、
振と云ひ、一體にギゴチなくて、皆しなやかに
居らぬ。中には袖があつて、却つて邪魔になつて
仕やうのないのさへある。

年増は先づ裾捌き、と思ひますから、是はまあ別
問題として、殊に此の若い娘、妙齡の娘となると、
その色氣、その風情、その容姿が、私には、大方袖
袂にあると思はれる。何故なら、彼等は、その袖や
袂で、悲しい時は涙も包む、嬉しい時の笑顔も蔽へ
ば、恥かしい時の袖屏風にもなり、鞆も包めば、人
形も抱く、貴重なものだと思はれるのである。

が、現代の繪にはその風情がない。衣服は敢て三越の看板を持つて来て、くつつけて置けば可いものではなからうと思ふ。

次に顔だが、此頃の繪は、藝妓を書いても中年から藝妓になつたやうなのが多数を占めて居る。事實はそれが多いのかも知れぬ、が、切めて繪に書く時だけは、私の望む處では皆「天稟」の藝妓にして貰ひ度いのだ。よし、その相が、何も富貴で、圓滿でなくとも構はぬ。繪に描いた花は散るもんぢやないんだから、何も敢て百二十歳まで生きる相でなくても可からうと思ふ。成程、人間として妾の相は困るかも知れぬ。が、繪は繪としての品位さへ備はつて居れば、よし、それとても構はぬと思ふ。

猶、是は肌の色ですが、是も私の考へでは、總別現代の美人畫は、顔の色が些と紅過ると思ふ。顔にしる、手にしる然うだ、血色が些と好過ぎはしないか。

勿論、衛生學の方から云へば、その方が所謂完全

な美人なのかも知れぬ。が、何しろ今の百二十歳の
一件だから、病的でも何でも可いから、色の白い方
が好からうと思ふ。第一「アゝ住い女だな」と思つ
た時に、誰しも決して、「血色が好いな」とは思ふ
まい、屹度「色の白い女だ」と思ふに相違ない。

又、聞く處に依ると、此頃の美人畫は、触ると、
ボツと血が通つて居て、暖いくらゐのがいゝとも言
ふが、然し、私の考へでは、猥りに手でも触るゝ事
を、憚るくらゐが佳からうと思ふ。昔の浮世繪の佳
いにはそれが多い。